

うそつきロボット

最初はウソをつく少年とオオカミの話が  
童話風に語られる。

南伊豆のある岬

地震計測所

目のみえない娘のおかげ、  
手さぐりで丘を  
ありてくる。あとを追いかけこるロボット

少年、娘の手をとって泣く。連れていってやる。  
娘、手さぐりで貝を拾う。少年、手伝ってやる。

「ありがと。……私の目、もうありません。  
のかしら……」

「なあるって、先生がいってましたよ。  
計測所でロボットを呼ぶ。ロボット急いで

戻って行き、こざえの兄堂本の地震計測所の仕  
事——フィンピア——ター——装束——を手伝う。

「ここ三か月、異常隆起も陥没もない。」  
マ

セントル対流は各走している。地震は当分のい  
わらう」

常本技師は結論を述べ

常本が妹を迎へに行つて居るすに、車掌の気

象庁から電話

生たロボットは二三日中にマダニやエ

ト8の大地震がおこると、おたらぬといふ

象象庁は大騒ぎ

下田の町、ロボットが走りまわつて叫んで

いる。『大地震がくるよ。大地震が！』

パニック状態の下田の町

象象庁から傳言が来て、二六の犯人はロボ

ットとわかる。故障したロボットは、し

かし、ロボット自身は、自分も人面をとい

はる。名前もムカヤクヤ

ロボットは科学者へ連行される

お茶の水がしるはる。とうき、ロボットは

苦悶する。さ美と反対のことをするやめるよう

にセツトされたらしい

お茶の水の家が火をた

いう内線かはいり、とんで行く。いつは、お  
 茶の水のすきに口ホットが内線が交換台に通  
 報したのた。

口ホットは逃げて行く。アトムが追跡する。  
 口ホットは山の中へ逃げ、村の人達に、おそ  
 るじい怪物口ホットに追われていると詐る。  
 ・アトムは村人に襲われる。そのすまに、

口ホットは山の中を走る列車に向って山くず  
 れで線路が埋まっていたいるなどいい。列車を  
 急停車させてしまい、自分もトニエルの車へ  
 かくれる。

アトムは、トニエルへとびこみ、ライトで  
 口ホットを見つけ、大格闘。そのゆすみに  
 トニエルが崩れる。

トニエルをぬけ出し、口ホットは、止って  
 いる列車に、さっきのはまぢがい、線路  
 のなともが、とわりをい。

列車は走り出す。  
 トニエルの中に土砂があるとも知らず、ト  
 ニエルへ近づき進む列車。

由一髪 大脱獄の寸前、アトムが列車を止め  
る。

(三)

地穀測正所へお茶め水が湧ぬてくる。

あのうそつきロボットは、あたくの助手で  
いなかつたのか。みせ、あのようにはうそをつ  
く回路に改造しとしまつたのか。

堂本は、このさわけの責任はすべて自分に  
あるという。堂本の妹のこづえは、ある病気の  
失明した。もう死ぬまでなかならないわろう。

助手のロボットはこづえと友だちで、正直な  
ロボットなの。つきりとこづえは病気の悲観的な  
予後五話してしまふわろう。するとこづえは  
とんぱに悲しむわろう。

そこで、彼はロボットの判断力の回路に、  
あふと正反対のこととをいわせるように組ませ  
しんのわらわ。  
ロボットはこづえに、つねにつきつとなあ  
りますよしといわせ、ほげまさせた。

こづえは、希望をもつた。

お茶の水は、予情を知って、同情しながらも、ロボットは正しい判断をさせなければ危険だと忠告する。

そこへ、アトムがロボットをつかまえて、とどげにまた、

お茶の水は、そのロボットの回路を修復して正しい判断がひき出るようになるおしな。

とずきはロボットが悲観的なことを話せば、とんなは悲しむだろう。

堂本は心が暗かった。

そのとき、コンピューターに異常な地震変動をキヤッチした。あまりかたに、大地震のそのおそれがあった。

ロボットは気象庁に連絡した。しかし、気象庁はロボットの声に全く信用をしない。

ロボットは外へとびまわした。あちこちで大

地震が、ひびくして下さいしと叫んで回った。しかし、誰ももう信じてなかった。それと

ころか、下田の人達は怒りにみちてロボットを

「このうそつきロボットめ！」

次の瞬間、ロボットは人々の手を止めやめ  
させにこわされていった。

予震がやってきた。人々はふるえ上がった。

おれ先にと逃げ出した。つづいて本震がおそ

うた。アトムは崖本とこがえを測定所からか

かえたとびました。隠れ去る測定所。下田の

町は片端から破壊されていく。

ひびんにごうた返す人々。アトムの活躍

がはじまうた。バゲ崩れる所を倒れこくる

高压線をもとへもどし、ハイウェイのひびわ

れに鋼鉄板を運んで来て車の渋滞を回復させ

セルの巨礫の下の人々をほり出して助

け、子供たちを人工芝ごと包んで運んでやる

……やがて救援のヘリ群がやって来た。アト

ムのエネルギーがちょうどまわって来た時

だった。

余震のためやらぬ所をこわれたロボット

をひろい上げるアトム。つかぬのえうらんと

つかやいた。

この子のせいじゃない

